

なり、譬へば士夫の身の如し、雙の毒箭を被り極めて苦痛を生ず、愚癡無聞の凡夫も亦復是の如し(五一頁)等とあるを見る、由是觀之、著者の見たる士夫とは(a)「刈つて莠草を拔き……除く者」か、或は(b)「斧を持って……堅處無き者」か或は(c)「二受を増長す……心愛なり」か或は「雙の毒箭……生ずる者」等の諸義ならざるべからず、擣くともその中何れかの一と解釋せざるを得ざるなり、士夫とは果して是の如く奇怪千萬なる定義を與へずんば解釋し得られざるものなるか、今一步を譲りてそれ等の義の中何れかを以て士夫の定義とせんに、「清淨信樂の心を士夫の勝財と名く(一七頁)の士夫は果してその何れの士夫なるか、著者はその解釋の文に於て「士夫の勝財は世寶にあらずして云々」となせり抑も士夫とは何物ぞ、著者自身に於ては勿論知悉せらるゝならんも、之に正當にして忠實なる解釋を與へられざるに於ては多少無責任の嫌あるにあらざるか。士夫といふが如き簡單なる語に對し是の如く論じ立つる事は余の欲する處にあらざるも、その茲に至りし原因は一に著者の訓譯方法の誤れるに存す、余淺學なりと雖も(a)は「譬へば士夫刈つて……除かんが如く云々」、(b)も亦同前(c)は「二受……心愛なり、譬へば士夫の身雙の毒箭……生ずるが如く云々」と譯すべきものなることを知る、而して士夫とは「人」の意なる事佛典常に用ふる所也、かくして初めて士夫なる語に對し隨時隨處正當なる解釋が得らるべしと信ず、勿論著者もかくの如き意ならんも、本卷所譯の文にては日本文法上解釋し易からず。又「是の如きの衆生(七頁)は「是の如く、衆生」と譯せざれば原意を失し、「如來は色已に盡き、心に善く解脫したまへり」

(一八九頁)は「如來は色已に盡き、心善く解脫したまへり」の誤譯にあらざるか。その他略す。

要するに本卷は未だ如上述叢書の目的を達し、その責任を盡したるものと謂ふを得ざるを憾む、他の卷に於て或は大なる效果顯はれしや之を知らずと雖も、本卷に依り余の希望を述べれば、尙大に細密なる注意と、深遠なる責任とを要し、一般世人の要求をも尙深く顧慮するの必要あるべしと信ず。然れども事業そのものに對しては余は雙手を擧げて賛意を表するもの也。(東京博文館發行、菊版四一五頁、定價壹圓八拾錢)(本田義英)

## 宗教研究

第二年第七號 宗教研究會編

先づ本欄には左の如き五氏の有益な研究發表が列載されてある。

一、初期基督教の美術に就て 文學士 濱田耕作

一、涅槃經論(續き) 文學博士 松本文三郎

一、神聖觀念論(續き) 文學士 赤松智城

一、于闐出土梵本法華經と妙本との關係 文學士 本田義英

一、梵文無量壽經批議(續き) 文學士 萩原雲來

濱田氏の所謂初期基督教の美術といふのは、最古の基督教的美術のある西曆一世紀の末から、ビザンツ式美術の發達した第六世紀の終り頃迄の、後に中世の基督教自身の美術となつて來た前身の、クラシク美術の一般に付て同氏が、親しく彼地層遊の經驗を材料として、建築、彫刻、繪畫、等を希臘、羅馬、印度美術と比較して興味深く説明された者で、先づ古代建築の參考として唯一と

見るべきカタコムベ、の説明から、此がロッシ氏の研究に依て、羅馬古代の遺風であつたとの考證に始まり、次にバジリカの寺院に付て因に佛教寺院との比較を論じ、支那の佛教寺院が官廳建築から山來したに反して、基督教の寺院は、或る事情の許に、私的住宅から變形し來つた者であると説かれ、又、彫刻に付ては、最古の耶蘇像から、古代は奇跡の題材が主で、中世以後になつてから始めて十字架上の耶蘇や、聖母に抱かれた耶蘇杯の題が取らるゝ様になつたと論じ、最後に繪畫に付て、特にモザイクの發達を説き佛教の韃馱羅美術と希臘美術との類例を引用して一層研究の趣味を鼓吹され、かくて基督教のシムボリズムの起源に言及して、十字より以前に、*Jesus Christ Son of God Saviour* の五字の頭字を取つた *イコノム* (魚) が廣く用ひられてゐた事を論究してある。一體から云ふと美術の研究杯は、百聞一見に著かない好適例の者であるが、同氏の研究の如きは得難い實驗の準備として、極めて有益なヒントと謝して宜からうと思ふ。次に松本氏の涅槃經論は、先號に、小乘涅槃經を論究せられた續きで、本號には、大乘涅槃經と、及び、涅槃支派の小部經十六種とに付て、最も權威ある研究を詳述された者である。先づ大乘涅槃經に付て古來、三存四缺の七譯と稱せらる者の考證から始まり、又涅槃經後分の如きは、南本遊行經から來た者で、研究上殆んど重視する價值無き事を説かれ、次に現存三譯の詳細なる品題異同の表を出し、少しく内容に立入つて、大乘涅槃經中の事實相違杯の數點を指摘し、成立年代と製作場所の推考に及んで、北天竺屬實の地で、西曆二百年から三百年迄の間に成立した者であらうと結論し、次に教義

の一般の特長を概観して、佛滅後、大乘部の思想から、般若の空思想を経て本經に到つたので、勿論法華經杯も本經以前に已存したであらうと論斷された。かくて、最後に大乘涅槃經の主眼たる三特長の教義、即ち、(一)佛身常住、(二)一切衆生悉有佛性(三)聞提成佛の三點に付て、最も思想發展上の過程を闡明する事に力説され、殊に闡提(Coehantra)成佛の意義を説明せらるゝ處杯は簡且つ明で、博士獨特の論題であると思ふ。最後に、涅槃支派の十六部經に付ては、或は法華部に入る可き者あり、或は小乘經の誤入杯ありとして、殊に大乘涅槃との前後年代の關係などを評論せられてゐるのは、同學の後參者に暗示する處、甚だ大なる者があると思ふ可きである。此の偉大な研究の發表に依て小乘教から眞如緣起の大思想に到る迄の變遷過程は殆んど一目瞭然となつたので、啻に佛教界のみならず、汎く印度學界を補益する處、實に偉大であると謂て良い。吾人は博士の努力に専心感謝しなくてはなるまい。次に、赤松氏の、神聖觀念論も先號の續きで、本號に於ては先づ神聖觀念發生の根源を論じ、此を原始的神秘的觀念の *Manu* に求め、次に神聖觀念が、一定の個人又は人格に分化して表現する處の個體化に付て論じ、最後に此の觀念の規範化する事に付て詳細に論ぜられてゐる。宗教社會學に一隻眼を具せらるゝ氏の論究は、必らずや讀者に或る者を徹底させずに已まないとする努力がある。吾人は切に引續いて、神聖化の論究の發表を拱手して待たう。次に、本田氏は、十餘年前に子岡地方で、發見された法華の古寫本の斷簡について、先づ發見の事情を詳細に論ぜられ、法華經の英佛譯杯より種々の梵本や、外國人の研究を紹

介され、かくて、新發見の梵文を妙本と比較して、本文的價値を推察し、一々梵文を表記して一目判然とした精密な論文である。法華研究を當面的として居る同氏の如きに取つて、斯る新材料の提給を得たのは、恰も旱天に雲霓を望んだ感があつたらうが、その勢は、論究の上に歴々と印して居る。同好専門家の愛讀を切に歎めて置く。次に萩原氏の梵文無量壽經批議も、先號からの続きで、本號には、四十一節から最後七十八節に至る迄の梵語字句の詳密な批評が加へられてある。同經の研究上、少なからぬヒントを與へるのである事は云ふ迄も無く、吾人は斯る批議に刺戟されて、本文を詳細するの慣習を養成したいと思ふ。後學の吾人は深く氏に感謝して然る可きである。以上は本欄の太要であるが、尙ほ雜纂中には在印度甲谷他の同教蓮氏が、『現存佛教梵本日録』なる者を報ぜられ、五十九種の現存梵本について、一々經題とその説明、註解、作者杯を指要せられてある。多くは秘密部の儀軌類が主であるらしいが、實地に彼に在て研究しつゝある者の、斯る報告は、吾人を利する處尠少でないから、大に歡迎すべきである。尙ほ終りに一言して置き度いのは、宗教研究會が成立以來、日尙ほ深からぬのに、漸次會員も増加し、社會の道俗何れを問はず、此の眞摯な研究機關に依て、宗教の新生命を捕へようとする士の擧つて集り來る事は、洵に慶幸に堪へない事であるが、會員外の士も、大に隨贊愛讀するの、増加せん事を希望して已まない者である。東京博文館發行。定價七十五錢(手島文倉)

## 佛像の研究

小野玄妙著

九八

この書は、印度、支那、日本に流傳せる大小顯密の佛像の形相を經律儀軌の本文に據つて説明したものである、序説に於て佛像研究の用意、造像の三大史的變遷、佛像の安置せられたる方式に據る觀察の仕方、變相、眞言の修法と其本尊、曼荼羅の種類等、要するに『何佛の像であるか』と言ふことを觀察する上の一般的知識を與へ、進んで第二章以下に於て、佛菩薩明王天部の諸像を網羅して、夫れを一々平易に且つ簡明に説述する。著者の言ふ如く、さきに同氏の著した『佛教美術概論』の各論の一部に相當するもので、佛教美術に關し、この方面の知識を必要とする種々の研究純美術的研究以外の諸種の研究に従ふ人が彼の書と共に必ず參考に供すべき有用なる著書である。東京市小石川區原町六番地丙午出版社發行定價金二圓。(植田)

## 寄贈書籍雜誌

- 日本基督教史 山本秀雄著 洛陽堂  
 スズノサ哲學大要(エチカ) 文學士小尾鐘治譯 岩波書店  
 天竺四教儀禮話 境野黃洋著 丙午出版社  
 哲學雜誌 思湖 丁酉倫理講演集 心理研究 六合雜誌 東洋哲學 無盡燈 東亞之光 早稻田文學 學校教育 教育内外教育評論 普通教育 教育研究 教育學界 教育界 教育時論 東京